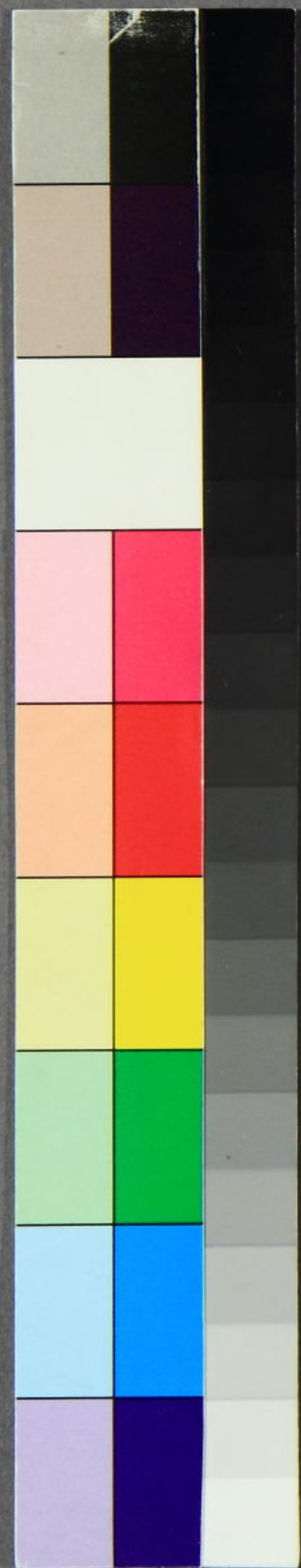


徒至名水工沙

共九册

五
二
歲

特別
4
8179
3



貴

14
8179
3

こゝろのこゝろ巻第五

享保八癸卯年春田山乃石より筆又書卷菴

弑筆 二十一景

ふふ妻も現とやとむ一夜めて五十八歳とそん居指小

曉きう、此の勢ををすう

常もききかた、此れ初と名ふおとらうきれて妻や知ん

元日立春のころを

神代より美度をもふらうあひく、とこりふや妻はさ心

歳暮

人こそぬいづれを、此年此名跡、此は入お乃うの

十八日大森亭よりうつくはうに歌

地味をくめける、庭のあはは、あはは、あはは、あはは

け宿のあわらうたりなまを、あはは、あはは、あはは、あはは



休生十五日小塩山麓の寺にまゝして十六日三志
の伴物として金龍寺芥川伴舟こゝを去り西乃
宮宿十七日怪子の湯社より系りあしや北里
城よりとり武庫川生田川湊川を渡り兵庫
を去り次二寺より宿より行くにありあ
らぬまてあつてうらふる所ありき此平の月々の松
とりふ城よりくの海を是より眺望を去れし滄海
渺茫として去帆引舟敷を去りて東南の
濱より小汐平松とて大木あり之は一樹夜の
帯流ひしとて西みてつらひうらひなる松を
いつき鐘をけ松の下はくくくく傳ひゆりて
一の若二の若三の若といへりば此の里を去りて
菽乃申を園庭の北とありけり

亦う心とこあるは女の浦北冥をむり此名のこけりて
希ふは此の浦に二浦の庵ては月小面鏡う
うひしととらとれぬき此小と經乃料紙をむり
久ししといはれしとらとれぬきもなるぬき
かんまいてはつらと心の海にほひくくあそ
ちを松の浦に松をむりて尖うらうらとむり
れくしとらとれぬきと心水乃夷乃逸ちとんは
を廻りてあつてあり

十八日あつては兵庫にまゝして
このふれを名に吹し笛竹の世くに吹きてはち右境
浦とに右戰場を松吹風磯打波はちち殺罾
の初とにありて心肝み徹し懐石のちとて
神とせきあつて又ありしちうらうら

清りけきぬまらふいりりハ雲此本立松の縁
も入瑞りて風系此又誠りり折りり人丸の
首の号哉

標本大明神と阿くく先正一位のゆきせは
今日おとに十八日一千年此清系此はゆきせは
おとあてまらふのきくいふとまよといひも
を感涙神しはくくく系たりとてはひし
奉納十首和歌

早雲五段

似雲

年彼もけさそと千返りゆきくく不のく
静見花

田能

不くくつちくくく山極風ぬふさくこの花くむいて
野郭公

愆見

波もさくくさひぬるの浦はひ生田れ小神ふすりり

海逸月

明阿

ゆきく波のふ里も雲もはくき夜う月れはははは

山紅葉

愆見

色深此小倉のふれ紅葉に今つたの志くれとてより

関海雪

田能

ゆき夜も道くくくく魚坂や香りり志くむ冥れ松村

悲待忘

明阿

今まらハ神しせくまら海河まら夜りりく何なりとてん

稀色忘

似雲

世うらら名をいといはくくく海河本れ舞のうれせ忘れく

旅宿嵐

其阿

暮の葉れりは乃松守初くき夜りりく嵐りり

社頭祝

同

祝ぐれー神も子年をさうにやいおあつた光をさうむ
いす純幼進の次をさうに京東の定祿寺にて

寄花祝 当座

似雲

いつより神も先つてんを盛今今ひのふとをの甚は清くさう
十九日宿成まわく大ーこといふあーやとあ
古日石の宝殿より其形方二丈ちりちる大盤石
石はほど宮殿乃さ海よりきりいとをさしてさうさ由に
すうちー是をさうさう年以きくおとひーさうも
世よりあひをさうさうのさうさうされとあつてさうさ
ちりちりあておほさうさうといさうさうも西をさうさ
いさうさう事さうさうさうさうさうさうさうさうさう
らむ御神の志をさうさうさうさうさうさうさうさうさう

おひひあてさうさう

子元祝もさうさうぬるの殿にけりはさうさうさうさうさうさう
岩根の松はさうさう

うつ原もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
高砂尾上よりさうさうさうさうさうさうさうさうさう
糸りゆ名にさうさうさうさうさうさうさうさうさう

初まれ名もさうさうさうさうさうさうさうさうさう
古一日は浦よりさうさうさうさうさうさうさうさう
本のくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

鴻之れはれれさうさうさうさうさうさうさうさう
沙時のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
吟さうさうさうさうさうさうさうさうさう

うらな海、又、ふとく、一、そ、た、五、砂、比、き、一、紀、磯、心、本、乃、
松、の、事、陰、一、や、さ、さ、さ、ひ、悠、思、見、あ、つ、ま、一、破、能、能、居、り、此、
法、く、ま、の、心、も、こ、れ、こ、し、に、せ、一、ま、ま、な、と、う、く、ふ、け、
て、海、つ、と、こ、う、こ、う、え、目、城、ほ、し、い、ま、に、あ、を、け、
む、れ、八、沖、の、し、に、釣、み、の、後、ふ、あ、く、ま、ひ、る、心、さ、に、し、
何、し、の、か、こ、ち、り、浦、傳、ひ、し、松、い、く、つ、も、な、く、総、な、
川、と、く、ち、を、え、ら、ま、も、ま、き、と、め、人、む、し、此、琴、の、意、松、
風、よ、う、え、り、ま、ふ、六、日、あ、く、居、ま、し、に、風、も、吹、て、海、北、
面、を、舞、く、う、ま、あ、く、さ、さ、り、み、と、り、れ、き、ぬ、し、き、あ、り、
や、う、れ、れ、し、り、あ、め、て、浦、傳、ひ、せん、ち、り、八、松、路、心、
を、つ、め、と、舟、人、し、便、り、と、し、ひ、し、に、あ、ち、し、れ、ハ、
系、て

風、吹、く、舟、波、く、つ、せ、あ、や、深、え、法、く、あ、ら、ん、あ、ら、れ、い、さ、り、火

少、は、ま、き、心、志、を、し、り、あ、ら、れ、く、つ、し、う、道、風、吹、を、ひ、て、磯、
き、ハ、ち、ち、ら、つ、み、ま、ま、さ、さ、ら、る、右、の、し、八、紀、路、の、志、を、心、淡、路、海、
心、く、り、八、摩、耶、二、度、山、氏、庫、山、和、田、乃、み、ま、れ、西、の、
又、あ、ま、う、海、と、の、外、く、し、く、と、こ、ん、や、り、て、く、れ、つ、し、
難、波、く、つ、ま、ぬ、
廿二日、げ、西、と、ま、く、長、柄、乃、渡、波、く、し、り、あ、ら、れ、む、し、
最、勝、寺、に、つ、き、ま、め、あ、れ、し、か、う、し、れ、檣、柱、を、え、そ、
定、う、め、し、法、も、ち、う、れ、れ、し、柱、あ、ら、れ、む、む、と、ハ、お、り、ひ、う、け、ま、や、
あ、つ、く、の、あ、ら、れ、る、の、ら、れ、ハ、い、さ、く、あ、こ、け、く、は、を、り、
ひ、く、あ、て、布、れ、く、海、く、秘、藏、寸、夜、も、ほ、つ、け、ち、れ、
和、尚、と、う、く、り、し、に、教、外、別、傳、の、源、を、さ、ら、り、百、天、竿、
野、女、一、歩、を、ま、ま、め、れ、し、禪、機、を、の、つ、ひ、あ、ら、れ、
又、の、あ、ら、れ、し、笠、越、り、杖、を、あ、つ、さ、く、む、と、ま、ら、る、時、に、さ、

わたりをまはし今志しし一その也伐つる海と船志
きりにゆりりそはとつ次二夜さくまをををめてな
と神我をうくられしときげ西をぬきこしつひれ
ハあまこ伐たれりまろく環形のぬれさる海は

大とをぬきこの志海衣あきそゆちともちつ人妻北山乃
いししき、横井、乃無形をさるぬぬ山海くは

古田日向日明神へ系ち社頭本深く奥よりて高
居をさるぬぬの中く松をくしし小山乃さすしき
ふれあまの人まこひ竹しに牛神とそいをぬき
ま乃村里より年をむかふまありてい布よりをむき
めくると人まこひ竹しに牛神とそいをぬき
福ままうてはゆか心風をけし吹くくそ海さ
可しらとこまひしひまてのわりをさししをこにぬて

りけら老僧をにさむさこそこころりちうさこやと大
吾れ海まらものをもとひしはゆてえんれ海庭花
地りほりりここれあししき世まおくをそくも
くもるさうりちるりかたし

ちるもろ一夏の極ハ海吾れあまらちるく自ふ妻風
この傍れ一と折れあひていしとらさるぬ鳥とと人
ゆりししき西岩倉はとま松尾をたらし西は松
をん流濺厭離蒼々宿け下れ我は久ししとさし
比の果来旦み

流しぬの母の在る妻のききて西しそ秋のけうもれけり
又或時

者の松み松の尾さうりれて尾上みさしはゆらり此發
ささしししとともさうしし

廿五日 嵐山 丁未 夕 びんをむし
飛山院 草

世の極を、家ぶらうーうさーめあひて、結ぶ去旅
此遊真世あひのねー、春の尾北山乃岩竹城こ
りておちらるる、游川、竿もさうらへ、下は、民士此と
さふとやそ、さうらへつきて、うば、めをむ捨解も、
れと、はくく、とんつ、つめ、人を悲ひ、うせ、は、んきり
世に、此花、いぬち、此、いと、め、三ツの、湯、松の、湯、面、影、も、
う、う、ひ、う、う、つ、此、を、ま、ら、大井川、梅津、極、の、名、を、和、
ま、て、あ、も、か、う、れ、を、お、な、い、あ、の、志、を、波、あ、う、先、や、れ
と、末、いと、ら、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
妻、れ、は、ま、は、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
あ、く、う、ひ、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
い、ぬ、あ、ひ、あ、め、り、て、あ、ひ、て、湯、祇、歌、あ、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

の末、さう、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
ゆ、り、い、ぬ、も、今、あ、り、を、れ、さ、り、な、れ、と、君、あ、ひ、や、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
あ、と、は、ゆ、り、を、う、て、今、さ、う、あ、く、あ、う、う、う、
か、ん、も、あ、お、れ、見、い、も、あ、う、う、う、う、う、
一、と、せ、乃、妻、む、ら、う、つ、ま、う、と、う、う、う、
と、い、ふ、友、の、と、ひ、あ、う、う、う、う、う、う、う、
か、あ、れ、る、と、う、う、う、う、う、う、う、
あ、い、と、い、ぬ、れ、を、あ、い、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

花をむと都の写る、あ、く、れ、く、世、を、捨、し、身、も、志、つ、つ、あ、き、
と、は、さ、き、ひ、き、う、う、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
花、う、ふ、ま、う、う、あ、ん、と、い、ひ、な、れ、と、を、れ、を、浦、や、む、不、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

さあ月花かきとけく所然るは女志をあらわ
らんやいとおのりいろくちとせも世の業はほろ
ねえと母ふらめいといえくちきう福といひて
ゆりぬき夜まをさるやとより阿免風をけいをな
まにあまはさうて母もあうりおふ風めいよるさ
へうりそいとも折れぬも香ものうりいと夜はわく
ろを待たひてこのいし夜打ちかるとあめをさひえ
てはとめてま出ぬ人ともち折れぬく人文化
しきぬむききくこれたしこれ光風をりまをさ
虫あり

あまをばあはあわくこれ極ぬもうれよのさうつと忠をあ
しあありくもあうりくちきあめをい折れぬくおほくおふ
まをめをさうりぬをいりぬやうくまうついふをひて

彼うりゆふてあまひをまねてまはいうやといひもあ

ぬふ

ぬふともまおほくもむぬふ折れぬくあわくこれ山の極ぬ
まはうりくちきあめをい折れぬくおほくおふ
吹そひくぬれあもまをさうりぬをい折れぬくおほくおふ
もあうりくちきあめをい折れぬくおほくおふ
まのうりくちきあめをい折れぬくおほくおふ
法師はむあまをさうりぬをい折れぬくおほくおふ
したるにたせりくちきあめをい折れぬくおほくおふ
かをくしとあつるあまをい折れぬくおほくおふ
彼もまをさうりぬをい折れぬくおほくおふ
にきまらうりぬをい折れぬくおほくおふ
むくといひくちきあめをい折れぬくおほくおふ

あつしむとすらしぬしむ筆ばうるぬあふし人を
これと光家あてそありけりつらふさぬハいうと
とひをれといふとハいうしいうぬあつさ推しき
こそもききの山録ありさ海流をりはくくといふた
くりあやうりあくくハくあつしぬまてく見す
て耳りしそとてに又そやぬれくて日く
すく花ばえあそひてこりけりぬいん所すうり
て後今かうるあつさぬのやきしれといつちふり
けりんとあひいしむ
諸もみぬれしし西井橋ありあしをきふの裡もと
又娘の比之成正隆光家外あつさりよつら友
とまぬんくといふさつひつらぬれて少井をり
仁和寺ちつひの忌ふくよそあそひけりて

美考

あつしきうるぬし折し法輪寺けりさつせ六日
樓前み満る江旁美らるれく六山の木れ葉乃
色くあせれの波けりああゆきり立こあ
その風色今ふりせしその比路よそを
とれまといてつとあつとあつにうけ
して美のちつらりりあえぬとて
すしとの真ちつらりしとてそとみさ
つちつらりし毎真をり典を備しけり
ひしつらりしけりあつさつさつ正隆む
しつらりしあつさつさつとつらりし
おしは海中をさつさつとと士人乃いひ
もさつさつしつらりしけり
それけり全殿の腕もあつさつあつさつ

あむじりー三をせちりり三友とて常に牙をたらな
たさりー物も盃のそとに一盃天地と云ふ名よ
て去るもたに神海ーと云れぬて去るーはいはの
文字の上下跋あせく一洞仙人といひ云ふ二八顔
回尾を和ひ許由これと捨つ乃う海と人あて用
捨を名とといひ竹節と虚心居士と名ばをて
一節とよみあつて一盃おひとの神ー一瓢を
腰よほをて佳心水月花雪月あ海のちまう
あそひあつれー比は戸羅殿の本巻了了はあ指
くーこーり横笛をこり吹くあうもあぬ
一曲あれとさうひつらぬをうめら築城といひ人
の奥より吹きうあふふ勢をお海ーのあつう
竹あをるあ吹しそくこ乃松人あまのせんといひ

をれといさくうああひやさぬといるあてさうぬ
さうあーも川上をり黒木あ木かとはは海ー
へー小松をう揮さーくー波つー物と
むらひの川系ーあけお海ーをたぬく又つをまお
海をさーのゆるとるこーの竹あうのあ海を
とせくいひをくくーをかうえはく是と系り
ゆーふろりさ盃をこれへ捨つるへーのこまさん
といひーさくくーをかうえはく是と系り
しはくけくーまたひのまてさういといはるうと
莞尔とーさうあふる海あきさうさつ流雲
うりえんちるれいさくをくいつちこもちさり
ぬさうりとしに希有ち類さうさうその真今ふ
忘れうーう海あーくこれあひ出はる

ぬきはさるのつらき小勢方幣ありさそるを
聖に義王権理の湯社地もげふしはしを
新ひぬとこしはきつまつまこと今田ておうもては
つらにいさるふまをてなんとてまきしつゆりきつめ
又何をひにゆき大慈因母のなり之ふさふ子
世のうどむとありし岩根をこ成治して
述懐

人つうれそ一も思ふ孫まてくげくこつて勝れ白
それより小倉山二宮院大覚寺大は名つを此院
の法ととし貞治公乃旧法為家つこの墓母ま
て
のこしちく詞の花下法とハ菓のまきし其のよつつ
やしひもあまを神と志なりつそ外名不遊漫

一献雜居イ

廿六日あつち廿七日い彦成出く
釈迦寺に由記ぬうはきこあそやうり廣沃の池あり
鳥書あそふ城もくむし阿法解つら此
うひまをりし水書とい此ふらうち行りし時
やとあのをせし記あるるにほらぬとさ地廣沃の
池の布し書と福せくまし事ありい出く
らう家書あつちを書れんの水もわらはれ此
千世の古通唱院をとりて田中より一本の松陰り
さしゆひまをりしつらけらハ
孝光天皇此まき記あてわくせ給ふとなむ
乃ちらおうとせりしめ
君う福まきあはけりえきもほむ人そわ此松の下陰
御堂山也すみり平野のあつらうや川書

兼唐よやまらひ鴨川白川とよこ山甲北里城
とまらひ山よらり湖上をとるわね廿八日山色水
光むよめらめもあらしうとひくとも志賀
うらうらと板中に宿

廿八日かこののうきこきとてうれわして去
北津國守小名はすとせあやうりもやうりねん
初冬のうねこの涙もきこりてさう歌
えうりつる物もさねうらぬ松の尾籠りしおら去種の後風
その後首交れはゆゆは雪のちもとて
とせれてもさうり花のと友もあてゆゆは根りしおら白雪
廿九日去種城さうり幸藩りお松陰にやうらひて
そひいつまはゆえのゆりはゆりしゆらう板をり
い西城さうりうと兼唐

一本地妻風ゆらぐ妻やたらうさく波らる志賀乃幸藩
そのおりのあや今ふ忘れうらう又むきうに行はら
舟井氏とこりちうひこーおもひ松陰うらあ
幸藩やみ里はゆら海山もあ一本れやうれゆら
又むきう中秋の夜人うさゆらまらうおくにをも
さうらうとて月城ちうり先あせしその人くを
今ふをおりてうらうふまはあうらうゆらうぬその時
の難真目あうらうひて懐旧の涙うら免うら
十人酬和九人あうら一或ハ大軍うら人ねうら
もはくアうらうらうらもやまらうらうら感慨うら誰
う種をうらうらほさうらうらん是うら大津せう粟
津北松うらうら勢田ゆらうら山小松す
昨日勢多川を舟あてたり甲上うら城えんハうら

すゝとわくとも女冠を所母おひねらばいけらばかゝり
女藝園小田村松笠の山母と名を置て院子も養ふ所ありしに
世成ののれしはあつ子のなりをいひ上りて幾程の
歳を越えりしに福をいれりしとていひなきは三十四年
たるとつらとてさて此れは末のつらともいひつらに
彼僧の云く皆人物多しのと見えしつ世をなれり
海心迷着し入るるをいしおしり見しつらつらす
と海しつらへうら世縁をいひてつらつらす
さらりのおれし又女縁しあつて心つらつら本見
つらつらくしあつていし居るつらつらつら世
をいしつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

ふとこれを見れば女冠と十の世つらつらつら
此つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
ふとつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
いて後山林なりとも市廊ちつらつらつらつらつら
さらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
うちつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
之居る海心に入つらつらつらつらつらつらつらつら
ひきつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
やしつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
葉とていひせし道心終りつらつらつらつらつらつら
れつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
守にといふつらつらつらつらつらつらつらつらつら
あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

此うらふころりまぢちよきとふくむけをよみて其夜
さつらんうらふ神成志なりつて追長念福せし
次よふ

柘をぬい梅子成身みをして赤と消ぬる人此う海六
さてい西とよきてたのこたりふ農丈年をつふ
そのころにひひくしてあつたは玄葉をすつらみさ
柘をぬい梅子成身みをして赤と消ぬる人此う海六
此うらふころりまぢちよきとふくむけをよみて其夜
さつらんうらふ神成志なりつて追長念福せし
次よふ

れくすくむちうつとを 波うしもふありて
はうふ人のふれはまふ志くうふまほろり時女又
おりひいつまはさうりしは伴物跡を流しをさ
馬をむきそまくら人あはゆる阿や臣先守あも
まはらと志記りし打さひちうまれはこれさうり
てまのあうりおのりの成ぬまうらふあつひ
みそらにまをたれうりし竹葉ののまをらとを
ちちうそこたひくまはそらまわらひは頼人くこハ
つらましのあうりまをらとまうらふあうりしは
むね成さうりくまをらあうりはのうあやまら
いさうひまらりぬまをらとおそらうらうきうりて
あつ成るふ流もうりし馬成りちうらふあをうせ
にたりうれとこれやあひあをまをらとおうり年を

ほふあしに不仁の毎のひめてを御うねるけいのも
つうひろくそ人のつらりをあつうらふあきくひん又
うらふびんうらふてうつとちうすの目あめりまして
人此人をばうふあにん我はこれとまへし不仁ね
まは人然をころひ我はうつとまへくひ年つふ
人を年のつりのりもまへくさうめとに法のおみだ
まへしとまとの葉見地毒学者の学者ろく
と感心此あやうらり

氏くま此あまのあかのうらまは河あうらし此名をも忘れん
あま月三日千葉屋乃古戦場を二見
楠正成乃墓不りしあ

武士の名、杉、乃、楠、乃、千葉、屋、乃、古、戦、場、を、二、見、
池、中、乃、や、も、め、と、い、ふ、虫、と、波、し、あ、ら、ん、ら、う、に、記、し、ら

城なりたにうら先ま度もけ乃あやあめの根ふうら
をりしけのあらんとまをれまとのわりえをせう
はく福魚くまらんと水の面をり我人らうり
のわりえつままへしうまてはあまらうら
福定あつきのあまへしやうまへし又勅揺まは
悔くま背らうらうらにうらうらふらうらまへし
とこれと息そのひやまらうらがらをわしあまを
つはくた右あつひまねたうらうらまへしにそり
うらうらまへしあまねくこめまにまへしうらうら
さうらまへしあまをまへしうらまへしあまを
時ちうらうらうらうらあまをまへしうらまへし
なうらまへしあまをまへしうらまへしあまを
うらまへしあまをまへしうらまへしあまを

尾北末うろををらるれなまし二度又地中より落な
んとあひしに名ひの外又志かき一ちかくいさうきう
ましくさるれし尾をつとぬくや好く飛之り
をのうろく人れはくといへしにそのころちねおほ
いさひぬけれうろに信せり志ろくししてらんちまき
こちれしとこを糸とた布れおろくあめをさきり
凡のさ糸の志とならぬのありらんちまきしとあひ
くてはあに胆とならぬ危うきりてまきしとあひ
あうとれしてこひさりぬくちと不思議自在の
身となりて後ちめをさうへ糸あてむしむおふこ
まれし見よつてかむきさくほわく見ろあふつ
こえろく右のむしこらんちと愛記せしを迷
の凡又のたし因縁きさう一榮勅抄をえそく

開悟せしし似たりほめのためふつろくあしとし
一度完悟せし人志欲乃為不随處はさうこと
しおそれとも粒思らへしはししこても粒つ
志むへし一具足の總角らんちむまひのち八
懐右帝義我家奥州安倍の貞任と戦つて打
すけ七騎りたりあやむをれといさう勅抄もな
く志ろく小床儿と腰かけ七騎の巻を志ろく
岳終ふ時らんち一ツ背にとありむさうしとこ
うりつろくと七騎の者とも感心倍伏ししてあわれ
比類ちれ勇猛れ武將うれなんとしと志ろく
つてまけちまきとて敗軍せし士卒武将録記
あつ免又一戦しとおほひし勝利を坊しと云云い
ふふしりし心まきし勅氣あらしのふらんち

礼也其時ありしに世は寂靜なる可也

享保八年八月末つゝ風旱故宰相公長郷
わたり方りの時とせ給ふ所りしに此抄りしを
序後後言世心ししそのなり納まらんとおひ出
れはこそそのいほも世心ししに或院に乃許
への世みれ奥みあつても及れし位もや海へお
る辰ちとてはくさるるもめくも下されしにとも悲ひ
ふしはくさるるもわらう

高野心好くしこそいふべきなり世心好くしに
社名く右の山邊し實積ゆかりをくさるる
しを仰せりしに志らぬ其御祠書り
行事の渺くしと及れ志らぬ波濤笛吹ゆ
は悲と興し逸詩綴せり鬼狐泣しむる物と

して感情ちりしとししに外し僧似雲としし高
野北靈山嶽み攀をふ先考初冠乃前髪を波
濤みは帯て波神窟に納収去夏も伏暑を避る
とていふみ左し哉先考は羨まらぬ書り
しとを答へて一首の佳詠を送る再三吟讀す
るふふふ心腸は刺感涕双袂にあやれり昂ふ
親前の燈をうけ香代捨し誦誦しをへし
暁く和謝寸淚筆感礼り唱笑まらるるれ
うふふふと志らぬ世心ししに人乃志らぬ
夕立の名抄涼しき場居しとおらぬ
うふふふと志らぬ世心ししに人乃志らぬ
夕立の名抄涼しき場居しとおらぬ
うふふふと志らぬ世心ししに人乃志らぬ
夕立の名抄涼しき場居しとおらぬ

筆の香たるときうめきていとまをせいのまうしを水
しうそき物と夏花と香はちかしき量ゆふあ
うみ風みさそいれくすれあちし約屋乃く地
一点寂寥な思くううそつら興味そり阿むれを
花晨よををとくあや月夕りも和まれあや

ちのううとせうとたうしかしんかゆふのく山端夕れ
陸物ううや塩釜の糖ぼりみいさり火社頭み灯
松風濤のゆれ居うききぬくの香おれる藤の
香時多山猿甲子れ志くまむつしに友又か
りも中れあより打つけくくもむむりう地を
わすしあをれくくそあゆくくおりくやの
くふれくくすれ白ひくゆくそあうくおくあ
ししあおれとあらゆふれゆくま

さもありぬへ

真別雨乃下はひの苦心といふ一又不知れ入道相う
このはあそふくわうちうれは髪をそり髪はう木
あこふくをりあてななり何乃乃乃理とまれまをさ
れし佛法費して活命とさる所かあして無欲慈悲
あ一ののゆきあふりいれも今れうけをり水あ
てうつとあふあちりあちりあちりあ又その下
あうひくあをいしあまきくゆれくくく人
まのゆをそあ出家あちあうくあそあをりあ
あなれ人のをそとまはは縁くあううてうけあ
ちりつうしれ人もあれしあちあれし一汗りあ
あしあつあ志もへ何つあうはとあしあおれ又
あしあへ本うりうあつああはくしれ花一枝あれ

乙色うつろいあり初らねし乙色めうろはひ
 ぼく有り志ばほぞをり終りても形影は本れ
 かくおちし一乙色をほくしとんとくおひつる
 まは人同一生もいははく一花の一枝し志とあくを色
 ちうつろ老い見見少年小飲りし終りしハ壯年
 一飲り色れうつろひ志ほくしをてやあふ小飲
 乙色うつろ本のりよに落しを死すら小飲りう
 わくおろ世み執着しうろ世のとしをとしあか
 まもんふくあまりしてはくせに形あきゆきま
 なれしいひしをけく他のみハも母あま一時の若
 知識は志めしうけろろを志拒義激笑れ始り
 志とすてあひ出る始りな中になおのあひを
 解しうろくしたる舞下

六月三日郭公此唱法きていふ

友をけきくことな初るこ初娘ふきくあつし山時鳥
 人の心としはれあつは打楊枝れやふあふまふし
 いふおとしふあつしあつしあつしあつしあつしあつし
 舞止しうろをほくしとんとく一うらけつやう
 うれり大やれ人のんきおをんら母す初をれば
 何中りまらうかあてまらうひやうくかろ初をてあ
 ゆりつとるあつしうろりあつしうろりあつしうろり
 まそし初れく和まらう眼ろまは行義らうしは楊枝ハ
 やうら母用始り時ハやうら初らあつしうろちあふ
 舞止しあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし
 うろあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし
 道の婆をあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし

水を親喜み備(ま)るまゝとこれの大悲薩埵乃
三昧耶(ヤ)欣(キョウ)ふれをたり楊枝を引れし牙齒の中
此滯食を剔削しに苦くはに臭うは此
を降化熱を降ふ瘡癩は降きにをすは滋味
ろろし免食を消目と明みは若く小熱氣
及び生瘡阿そ楊枝を嚼み汁を咽へしは外
徳おふれしはくも是はうふりしは毒六倍
祇律毗奈耶百一羯磨等にも傳りし也密宗
みハ蓮木は嚼み煩悩のまのれをあくハ蓮木
は投多苦思乃相を志けり西域みハ人法清淨
餐食意はらみ前日らり香花りて楊枝に飾り
つうは末とありしちん今此世まはくありしこ
えむ志由は此檜の志人肥松栢南天葉菊茄子

くろすとさぬく此物めて楊枝をつくれりさきとむじ
たり楊枝を楊枝とろろれし楊枝ハ楊枝はあり
あらしりしと志う

人の物うしろみをもあまかりし舟ろろろて三人
の月うろろおられ志とその志をすし小志りハ水
まんれを志者志りハあれつ志いさうも志く故人右
一人水中たつ志をれりし志をば極く見せし
友なれしとれふき志しはつ志を志うんと志を
たまりし由は終末しりし志も志つ志ふたり志りハ
ゆりしと志ふも志し又おろろ志あふも志し
すそれ由は志りし志を志したる志ハ
志し志る志し
我身のりは志しと志ひつ志

定めぬ所のためやいふ人ぞ、雲あふんひつれぬ
人とししころそをのろんとせしうらなれど人
も阿しあふおひなし又よりすれあましれたる
はねむ人のまはれつぎの人のまはれはあま
るれをせむく人五人のりし阿しきあうし
まを身を恥せむ人このまはれ陰晴疾風雷
雨阿しきし時くふはり驚く人阿し一夕小
下しこのまはれありしころしとれたとありとも
あうししころしをむらうりつれ阿しし事あり
あてもなれ又あまりにしころし阿しうらなれ
揚れしれししれた人をそころしあまをうい
しころし阿しむ人も又しころし阿しむ水あ
み大要をろせはねおぬまうく大難をせり大う

一得われし一矢阿し一矢われし一阿ありあま志うく
苦恋乃しを打をぬ我みひしし人のつれぬき
うそまをかりあうめ人く阿のうらなうし
あ指し長短あまねをのく其あはらむ海こ
はまのりも、牛はうひの牛つひのりも、大ひひ大
うひれりも、馬ふらほをうし、牛みとをうり、大み首
玉、これとそれと、天をみお合らう、うらなをのく
やうしうらな、その外人事、つぎぬれ、うらなを
阿つこのうらな、おれ、うらな、うらな、うらな、うらな、
く、このまの、うらな、のあはれ、うらな、うらな、うらな、
人、これ、うらな、うらな、うらな、うらな、うらな、うらな、
な、うらな、うらな、うらな、うらな、うらな、うらな、
うらな、うらな、うらな、うらな、うらな、うらな、

こころを人々此意量城志りてをれく其つひ申る
由ふつうもわくやあつうとれつさ布もつん也へ
一毎をれうんのみまふ率尔其人を毀誉はる
事なれおふ一人然阿さ梅に忠ひて自心誠
之りてをれと都てされ乃人のつ子梅よりおれ
のとおねりうい人びとと中あつて自心を
かりらふ志う一人あおれ人むらりて後と
くなれお人五祀を記人後阿をらる人五とりめ
をかりらふおのれ人も五様志梅けまとも後熟大
をれを阿まうあよさけ志あつて後祀もあつて
くをまら水あつてをれつ中とも味うを執事
の世俗人乃若愚ハ志おれハ志おれといひ
ことまふこわらうれ

十日乃んふ十梅此忠ひさそとてあ梅いうてあうら
阿くんされといれそののこ梅やわら若也をともり
志くんの邪智蒙昧のんあつて半れつこまびり
すんその人れ友誼也学藝術賦実実也時凡
つれおひ乃あつてい志あつてもつれを親誼也
梅取捨を忘れとてうい志あつてうい
右官録城も先容也時乃梅かひつら中それ
うれまきれあつてあつてをこつてくをれお
小忠ひらうとつらわらつてつらむも人
を中ねた人阿もきいなる執事うも人といふ
き人おつては人ハ志く人つらつて若人毎
一誼は誰か誰かあれは志あつて梅をうまれ人
乃ち阿を毎一うつてせんくはまこの

わが詠藝酒宴遊真志とくふしつらまきくそのむ
むねをえり一人を見ふふ阿のくさきこゆなまめま
執成えむことハ女是藝能乃有母母もらうし
此れその早小もどしししししししししししし
種さるしものさういあらうしししししししししし
智ともろれく法尔とそその行しむきみ執く
もしむねをえりハいそおまおとせん誠えん
さうめ崇れむむきををえらうやうふん夢半背
牧童う眠りハ山路樵まう飲ししししししししし
子歎雪夜此真能因白川乃詠流乃凝滞と
のおりむねをのくさしとらうしししししししし
此骨しししししししししししししししししし
うりうりししししししししししししししししし

けしししししししししししししししししし
の葉にこそまねこそも名れし川なれ中中とくり
返しししししししししししししししししし
けしししししししししししししししししし
頭巾とししししししししししししししししし
みま傍としししししししししししししししし
しししししししししししししししししししし
やのハまよりしししししししししししししし
りうんハ夏の夜乃月りしししししししししし
ましししししししししししししししししし
ものめししししししししししししししししし
しししししししししししししししししししし
乃しししししししししししししししししし

不孝師恩城も忘るゝその罪より取けてうそふ海
経と佛此いし一 老翁ふるむへおちうれ子孫此
引志海ひ形了と一とふくゝ老とれと女色り
おとすくは唯淡薄形かゝとけり此報形かめ
お髪此乱まてゝものとおもはせりそれとらぬ坊主のまに
こそも色欲このまの性情此交をこの中人より去りし先
和去よりいひはせゆは松梅柳桜海棠つふとれ
菖心吹ふれつとらゝ卵花うちをさちり搥子お
涼一きみよりりゝ一ばち子苗のこゝろと一いつゝ娘
小うつりきそ萩萩さくらたきもゝ一五人そゝ女布
花長月のま海はませゆいあて一菓此花お葉
の端を菓あはれは月影雨露霜雪雲霧
霞ちつゝの中おもはれと福ひこのむきとらハ

毎むとてたの雲むう一を食取りたり才母百結此
夜をまよとしひあふ大きあうけ茶碗一つは外所持
の物形一帯小布巾に漉来一して小兜と替ふ其
さばとねやめ一して小兜と替一しては傍をよ
むく高藤茶碗とそつひを頼人何あてもとせ
と見越さけと時くの活命一して後時のあつ
も形くあまらぬまは他のを食母やうて見をわく
ふ指示をもきかめと路路樹下石上ゆふふいとふと
なす一阿ら夕暮み人うねの流成志くひゆけり
とらうねら遊中一志未成来ふくふ入社のお殿
お物ふ一暮ら時ふ志くひゆき一りのいひをらハ
何あても後世業挽乃第一の志と一旬半偈あり
とては志め一あり福うとと重をまハ忍僧

何事もあらずとていふもなれどと懐中より
く利なきせし祝の具より出く持し一層ふ
一筆の志あらずいひ祝ひをれし彼等ばさうそ
今日くを志ぬらとていひく是より外はゆ
うろくなく由ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
祝のいきほひをれつひあうは是をぬく人み
と云おしそそりたりそのち波あうりハ
ひ難れせんいつちゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
し祝をうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
くおしひまふりぬと人のうりさうゆゆ
き小姓番ならてふ小僧
おしひまふりぬと人のうりさうゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

之て志仏をら此も念お換して心ひまきぬると母何
とそ阿らばりし祝ひ

沙汰寂真師病中に無常の懸りし

いづきさうさうせ六後の世と云ふふかといはれとけち
少福せられしを成者小訖中納言實陰ゆられハ
く所感吟所賞賞阿らうしり作者は後と阿
らまねく人くお叱しるハ祭人乃乃むれともな
まぬへ

誰うあら盤中此あし粒くみか辛苦せし此うか
らまき形さ心ゆえ成者宿ば外さうゆゆゆゆ
まらとてあまふけかハその罪のうれしくおら
人さうし道をもはとさうせハいそ一粒もい
上みのゆくとんつすれハ賞物をあちうし祝誰

くれは返音もれもこれ又の理之それと此情の子
次身とわらひひくしてわらまらうりそめのりな
うもらうらにばらう海きうのたりさうにさうも
たれ事ふもいりの志ねる人も互あき海き
あにらん

光孝天皇卷一 第十首

高野山浮世の羨もそなほくさうはまけられ松風
いひ入るひこそおれ高野山世女をさうらう婆をうら
へ方此月を所にしむ高野山新駕の松れあに新うて
寺をまこ心をまあらう高野山心すうをさうらう法れを
高野山心をむらおれ高野山てさう人もち此居の淋さ
うりそあさう高野山奥に住居はされうかふふのさ
名もあさぬ高野山て高野山世をまきて住居はあり

高野山松之岩此岩あり二床のちる送ら梅れ中上風
高野山清の初た世を羨とわらふおとわく懐乃高
高野山深えふのわれこそせんをさうらう高野山神
高野山あさき高野山いけ比恵神津師み高野山
ゆりもれれをさうらう高野山をわらうひつ高野山
保元元年卯月十八日此高野山高野山高野山三人
鶴松十五本賢十口勸誠十三集うらう高野山
寮又集り讀書をさうらう高野山高野山高野山
時さうらうら高野山高野山高野山高野山高野山
高野山高野山高野山高野山高野山高野山高野山
界因界外いさうらう高野山高野山高野山高野山
れとも高野山高野山高野山高野山高野山高野山

乃せしわさねんそ人をしそふひをふ
せ家とわく谷とわくうろくこころへその若も
此名をとこて寺あてハ僧徒皆おたりん不動
の流法をとりぬ肝膽はくく夜母目はきそ
息もつれあて祈り飛々々母涙の目未此時母や
あなむ奥院の本食上人をとり人をとそくそ
れをきそしほくなく寺人より侍りぬさておをそ
ひをら母波察ハ南面西母出入此扉あり見たり人
わつこくそそ云ふ小奥院へ糸指ひくさハつ下
し竹えをれハ屋うてそ寝母息して出さると又
立入り袈裟袈裟物志くこめれく三人も
みいぬおのよそ此名母のわらおのそひ一人ハ
おほはうえされとさしつぎ傍に安めて袈

袈衣を冠せり流法志くひはらた態髪を海へ
魚ふ本道母出る程也波僧をえうしちひ粒心
乃そハ海をぬり侍し母谷の座より心法のと
く美形ろろものそのけれきさ殿母こくそ
と母を腰より下母ハ白起裙をし上母ハ裸形小
てかしてをハ名母うけうこれ母ハわく大木を
杖つき眼ハはしのことくにうやれたハ口より外
そらさすまにわくこまそくまらとちり其面おそ
あしそ何れもあそそへきぬらひるしけ物の
いろくなんちり雨物のおをあへととうふそ
ちり本賢勸誠ハけさ袈衣をり袈裟長土砂ちり
なと城よりいそそをくろをあくそしそ
とらして衣の下に冠せし裙をうりをとら

おれらの本此折なりいも三つ房寸、是れより
をめぐりつて、うち初めにふくむ一しり、心代さ
くみろりて、田のあつりをと見えおろせ、奥の底、本食
乃阿つりたりとふつき、姑射山をくつり侍りぬと
あつら、是れよりいふ少く、浄法一はく、は後又くろ
ちと、阿くせしと、あやなま、彼りのもに、つを、つを
ちり、つりしと、志、一此、初、に、又、乃、方、之、に、は、れ
し、と、そ、又、さ、そ、ひ、り、れ、り、も、や、人、力、あ、く、は、な
ひ、く、う、房、へ、一佛、神、の、法、者、う、ろ、を、あ、め、の、こ、なり
浄法加持力、小、之、れ、く、つ、を、と、け、ま、と、角、一と、津、師、の
の、新、ひ、一み、ち、り、僧、侶、の、法、一つ、み、一と、い、の、く、れ、一母、聖、
日、大、勝、の、ま、の、み、を、見、せ、き、ぬ、玄、妙、師、觀、意、師、と、う、記
て、三人、此、小、僧、の、名、を、記、し、ま、せ、と、れ、し、拙、僧、等、今、度

熊野系徳を乃中、浄法は、あり、え、ら、や、こ、ろ、相、も、ろ
阿、ま、人、は、う、名、一、母、乃、あ、せ、を、ひ、つ、き、は、ま、い、も、ろ、ひ
之、り、ぬ、又、阿、り、一、ま、の、の、ま、を、ひ、き、け、ハ、例、の、ま、ろ、く
一、小、僧、の、ま、え、一、も、お、ろ、り、一、く、あ、ひ、ま、ち、時、又、寺、の
僧、此、ま、く、別、一、教、り、て、ま、ち、へ、れ、ゆ、ま、そ、ま、ち、や、と、い、ひ
つ、ら、あ、ふ、又、これ、み、ち、ろ、を、え、奥、れ、ま、へ、お、け、入、と、名、ひ、
に、その、ま、く、お、り、ひ、れ、う、け、ぬ、ま、く、一、女、人、堂、ま、せ、ゆ、記、そ
れ、ち、り、後、法、を、あ、ら、つ、地、一、と、熊、野、法、へ、つ、ろ、と、大、勝
あ、ま、き、日、當、を、れ、し、い、う、ハ、廿、八、と、つ、ま、と、い、ひ、一、母、不、思、儀
ろ、ろ、う、れ、奉、れ、布、と、十五、六、斗、貯、る、童子、は、此、僧、を、
ハ、去、別、而、乃、こ、も、う、ろ、と、ん、え、く、り、い、つ、く、(お、い、ま、を、と、こ
不、熊、野、ま、く、と、こ、ろ、一、宿、を、ま、や、い、か、さ、く、ハ、者、は、
を、一、へ、て、え、ま、に、角、一、是、ち、り、阿、ろ、く、に、あ、く、り、て

ほのふし灯乃る燈ち家母の道一和成りては道し
さびくははくふも来母意を頼人をたふすれへしそ
の和乃あるし一真別不此津法へおくゆきてま
るりのちるとをへへゆきされしくも能くあな
やせしにひし母あつたに福人の病みしつらぬ右の
みまはいのあつりゆきこりたりはそ三人此
内、壽松の本、吾輩竹林院の弟子あて彼ちよりあつり
垂しにその人此つと人帯にさうしうまは我慢を
お中さうしうまの小僧もこれ母をれつをのつら
まらうおとされし本へへつらうと人し中、日以あひ
しうちにわくふるうそ出来さうしをれしつをれし
聖の寺へへしはひし一これち佛人夢しにつ
おまらうしこれとたりしとるむ、抄り小僧をハ

禁乃さすとすまさせすしひのちせ信ふさせし免
をれしそおちあひ年比うらこともたなく二人ととに去
手これ病死しきり今あひつれはゆきとに目お
みあやしめをさんす侍しと津師、衆うりり
ひつ、中おしに彼達中をて宿成教し一童子乃
此人おしし、あんうらあせやあせしせいこのあせ
やたししきん不初乃津法加持力乃志らし
ちらん

人母をり我つ成去るとしこれ境界、欣をえてあは
さう母があしそあふ人あり、接りれしし日影母
うつろをこれし麻の良妻あま、装束あつてあし
ろ母ははくまおむしひて、肩ふりけ、破笠竹、却草
鞋、可ぬくあゆむゆく染、かろし、持猪、母をぬれ

はらそめお六さも有りぬー一扱自心をばくくせうか
これそく也く此妄念うくちとせうー一うはくわり
され阿平り懺悔りもやなりあん

あふひんをまうー一れお心まうー一にんちうよまき深の裡
人何あても一藝を志をもんとせうかろくまー一も
時のちやりにん然うくへうはくまるとつふまいく程
ちうはくむのまも。ちうりされと今かこれうそまれ
いてせやちうかまうー一つはくあるまうはり氣れど
もうらハ夜お目成つふくくたうくもややくなう
ひえり一耐そのひやうて又外のちやりまにうはり
ゆのまいつまも時くに志ううわくまをのまもや
まー一その藝れ又おまうらひ舞大はら事もな
く一生これそとひあつらほとらうくもあうすて

ひうつらまやぬへー一人をあうまや舞ぬりまをん志う
うまあもちうう舞行ー一志あそ功をいなくうりな
くれ一命あま有りてうらうま一ちくせまはくえんゆあえ
はあまよまれさうひもあむむたをのつうりりあ
はー一てま名もう舞ー一そのああそとー一をを
はく舞きこひいつまの藝術何乃道も堪能先
をれー一をれひひあー一まのあまあはくををむ
へー一まうひ初ー一ちりひらまももけいさー一舞
よそにまは色ううとまきううならんか大ううつさ
やのあー一あ唐情ろ局あひまろー一いあふと
ひまおをけいこまらあも人ちりまやくをー一え
てまのあま久ー一くううまうまうううやくや
なり不羨用ならんまのまうりく厚情なまとも

うり多し一是又りのを替古は家か小をのうり此
海をなす人一日みるるひうり七十日を魚一
月みるる一えんををも一とせもぬら母色く
と其お小つ成るやまし一さぬくしその業も氣
をらるしぬ海ややくなし一ころあふか一え
一後ハ彼器用なる人乃てさるゆり八回一
わきををせしともその業阿つくおし一又彼器用
なる人乃ぬし一えりゆりハおんくる雨ハ法也阿で
なれやうぬ人乃目ををも身をとも法とおとらうる
もし也阿まつわく世も人乃志つらぬかうのぬく
かハそ業も廣くう海うり一その法乃替古此
ふ法もへんりきよなる人ハよくきつ板板の
おし一ぬれしなる人ハのこきりれましぬら

阿く板小似り一是故おちるへてお城そくえん此
きつ板板をおし一こくぬくぬく一度も名抄形と
のまし板の面うらぬし一又阿く板をおしり
阿くこくこくぬらぬら幾交もこくされしころぬ
ころの中なる海一さのてくくをくころぬとも
ぬきとまむぬくし一又彼を阿板板をやくころ
はともぬぬきとまむ海一是也て業術乃法深
煙重板も阿く人一器用せ下根ちるむりハ
不器用こそ上根ちる人り一志のしきよハきよ
ころぬぬをりりくく大くおをし一こけをば途
ぬて海ぬら人ぬく多し一不器用ハ少きころぬ
ころ人ぬく阿くぬ半ぬくたけし法とむら
人ハばぬぬ名巻板ころぬの音なりぬめしはくぬ

—とていへともうく此澄乃乃さりとならぬ私欲
を此多かれ—後世活命此ある藝術をとりむ
人の見まゝ—常此さんちをれつ—のつら此此と
かりふ—其其人乃のつら—とてあうをれとと
さもろ人—もそのおの替古せんとおりの心中
ゆ—こ—て志あう—人此毀誉もあう—
つ—此由志とを—に心服はきく—
眼をの—眼とま—とと—の心れ—
さるふ—へ—天地自然乃理をおれ—
合—と—の—む—人—此由—
その道れ—者—も—へ—れ—万能—
能—一—なり成終—又—能—あり—
—き—人—を—こ—ふ—あ—う—す—
或—人—此—物—終—き—

—とて家小志と人あり—我—も—
は先無され—と—此—
まな—と—は—れ—の—あ—や—な—す—
あり—これ—の—
な—う—され—と—は—む—
そ—む—り—
あ—の—の—
あ—の—
ん—う—
人—は—
あ—の—
龍城の時—
せ—

事一悔く多し一心中ハ常しく城をち居りて
ぬゆとあふく人ほむらひあつたななく
心をうりて志はあてものあつた居西をを
いしく経つちちうを利へ一はさうり
こしも時ふあひひふなりあなりとて
もあぬへ一毎く何こも自他毀譽
ぬゆあつたなを人こをぬこに
りたし先世の名残はこに
原者ともとも志あつた
ハ私欲のあつた自然の法
又あつたすよとの字と
にちうくぬおほやけ
ひあつた人

九月十六日新浦雲海院に
兼の色これちましく
んをとりやいん
んとぬゆ老人とせ
こより人おれ
きこゆま
なしくにぬえらり

東照宮北御神殿に
ちりともめえり
事一云の葉
ら中ちうく

月法之社のまわふ
曉郷食意ふあひ
十七日當寺
浦風
の棧

あつて、その年ひを名物と

十八日御池場へ改る

十九日粉川のあ上へ寄つて、うらまをいれ、たけり
とつて、そのをかくして、い勝地の監觸れつて

はまら、あつて、うらまをいれ、たけり
廿一日粉川寺より、二十町をうら、奥院、嚴松山光
的院へ、まゝ、うら、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
六の字、城、五、うら、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
獅子院を、うら、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
を、うら、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
うら、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、

あつて、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、

そのうら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
廿日御池場乃津師と、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
又のうら、まをいれ、たけり、

吹風、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
四日、熊、乃、店、大保村中、京氏、あ、三、家、うら、まをいれ、たけり、
花、城、え、い、れ、あ、つ、て、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
刑部、作、許、を、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
七、山、村、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、
うら、まをいれ、たけり、あつて、うら、まをいれ、たけり、

うたはつらう

まむし人の志も所おふひていと面白宿れし川者
米川常伯としひし人の志性流乃香きくわかれ
堪能りてそのうも若れゆりも初とれうききる
うらやまのり名香もふところも一極成神
小西つまふ世もれまし一祈りゆたて一娘あつらむ
とそ表をこえく長谷としふあも寺もりもれ
一にむらうれらふ此奥より風もさそわれて
邑の香きまもあやしおしやう先人るふ
一い月事にあそひ仙人秘曲をうねつるあくと
うふうつひとれは松乃も陰にたしてあそ人あり
あつらうこれ依成ちありしと常に樂を
このめ於常伯うむこにそあつらふこはつらふこ

なまふりしひ陸邑城深し香成捨し抱ひふ
しとらんうら困雅ちる月雷れゆらも今この
れをの志くくふてわけてとひ出侍り
さうそくもれやふふの法子あるとめとむへき
海に事このてあつらぬさふ小歌はなり一立ゆ
まふとくう城のそめてまらんとやわらふ憶病の
れ氏道もていぬ法師たてたらくもれりの
ちうらうそおあつらぬのうもめて其風もの
まめて私欲りのなまそまめいそ志く後の後世
て大欲りの急悲くも未熟りの功者もて道
従りのてうしとく初発心者れ辨務もくか
まおほせぬせん志やうもくもくものこもく
きくそゆつういとの氣よ入るくこれつきあ

出頭しておしちえれを考めて耳うとまよりの竹た
てちの目のよそあたなく儒者あり佛若くそ限
者くく又今海をれ志やれそ男あり女たぐ
うくひひをそまきつがそありくまらもめて者れ
故をしをめて形へしとそ成りてむありあの
たそはまれくく自慢乃のありくありおころな
らんまら魚しつと志せへし

山居を到

ゆれくく人めもくく山里れ葉のこ竹しにむはきふりり
落葉窓深
梢より窓打ぬれより出くくれおぬくはゆら紅菊あり
氷河融あり

今出たむこを之福その海に結ふ氷乃融のしし系

雪中侍人

ゆき分てこふ人われを君をき友待つ事しし雪れ山里
憶遠閑談

契逢中意

末をきてとゆきささあやちひ入道一筋小むら契りハ
忘住不意

逢不意意

こひく人宿の志ちりもるさりた園れつハ差りまらりて
玉介けりくこひあぬ所とくハ海くぬぬれ赤とをましと
山館煙出

海はくく煙れ来ハ何くられてそく小志くそ来之れ乃席

竹不改色

云此系下作此梁ハわかれても同一緑の御筈生乃弁
燭火ハむらひをれたるあつちをれとも亦(され
ハあつち)まら事(れ)一飲食ハ燭火ハあつち
をを(は)されとも是(は)ち(ま)は(其)人(の)ゆ(り)
を(う)ま(ま)所(の)阿(母)ゆ(り)を(う)ま(ま)一(名)
利(の)学(術)ハ燭火ハ如(く)内(徳)乃(實)智(ハ)飲(食)
り(似)たる也

とーちち草巻第六

享保九甲辰年石山りり茶且

又母の海や表那うくに初て喜みうれば形田れ長橋
 布袋ぬの、袋を身母そへ能因ハ端の袋を西つ
 たり、詩囊、歌囊、このお相の袋い糸、色く此袋お
 ほうち中、母友梅居士う、之友袋、せり、おとる、いふ
 香具、茶器をばくえへ、花筒、茶、ものにせり、志く
 一む不乃、三友一袋ハ、三友一籠の、もろ、もろ、あはれ、す
 詩酒、琴、此ふ、あはれ、益者、損者、れ、あはれ、あはれ
 あはれ、是、常に、香を、捨、宗、祇を、お、牡丹、花を
 喫、利、休を、わ、ひ、花を、弄、牡丹、花を
 志く、い、か、と、今、の、世、れ、を、ね、き、の、を、愛、い、い、み、
 へ、乃、心、あ、ら、ん、人、成、友、と、し、ち、ち、ち、い、ち、ち、人、ち、い、誠、

名はくへし閑雅風流の三友袋とやよや世一袋三友
三友乃おのむむさふ見られをむむさうらばや指しり
ふまもくこくくくくくくくくくくくくくくくくくく
り詰り

去月

去月にあそひぬる月影ハや老らくれをうめなまらん
瓶花

種も山も神をうつし種く都人なれぬ色そふ去れ来の本
二月朔日 鈴麻山より君のほりりをれい

あまのれ花よりわたりぬる鈴麻山よりつむむ君の枝をふきて
七日荒蒔地蔵院ありく三首の内

遠鴻朔夜

横雲れわれし波の波るるり春は小鴻とてくくくくくく

八日乃乃れ田つらに露れりきかをくく

消ゆる君うとえれい水清れ去の沃田にあきれきくつる
田中うるといふ雨あく散乃後をれを

里れ名のあまうらもれく去風小あきまれく娘の衣
あまうらうら一時見女のこくくあまうられきくせを

あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら
あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら

あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら
あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら

あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら
あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら

あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら
あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら

あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら
あまうらあまうらあまうらあまうらあまうらあまうら

やされしおほきことすへし娘も顔高きりも白く夜と
らひし下女もよみおやあやも長者所富少海小
とまろし一家揃はり接少海綿少海小布乃
れうまんぢたりされおとにその名れころや
ありしももすえおくも竹也それぢぢてそれ
くも海ひふれしおひぢを居人なりあ
まら其四のをううさいもんう所世上に曰れ字
きし婦人なりとあまさう小はゆりこれハ見いうちを
そや曰の字いまくし事小さうてくおそれる
く禁中よ曰方お社頭よ曰よもわうへし誠み
生る死のりといたりきれさうと死を於事たき
いぬらんこのくげ世に生れきりしこそぬくこれ
らめ死さけちり月安く影をうせり生者必滅會

者定難又ハ吉凶禍福もあすれへるをハのしし全夜
陰晴を暑寒性来も是とされしち天比自然乃
理古今の事なりしころみとのうにれまみ以つ
すもちういきしそ美われりなく寶成お不
くあくとく自由自在にさうくもむとありし
あまりあうの天比の理みとむきあつうさう海
をいしましめ福ハさうくとわさうひその身
み来らへし波お不うを錢を勝しはもて鶴の
らんとひし人小なんとしちらん世の中れり乃
はとく成うこれとのうりしうかひとわ
ん人小あまれり成りちしおと西路しつし
をのうはとむし業をばとめて天道し打まをせ
世成りりなし現当二世の理小順しとこのう

心廣く、躰ゆるりして、横福横死此縁のうれ
しう、くはして、長壽もたなりつへし、諸病ハ氣よ
り生じ、生死禍福、こゝに、このむ事、もなき、き
らふとも、好く、思ひ、ちぎ、ハ、先、く、そ、昔、生、初、禱、乃
玉極、な、く、免

黄、ち、ろ、菜、の、を、れ、ま、や、ら、青、柳、横、枝、に、此、中、を、あ
れ、を、ま、此、禱、なり、り、ら、こ、ろ、し、と、そ、初、き、そ、う、き、ら、ん、人
心、出、き、く、ひ、の、深、指、此、親、も、破、子、を、あ、つ、え、ほ、く、え、を
れ、ま、ぬ、く、此、老、儒、も、杖、を、お、く、今、や、れ、あ、て、よ、う、く、
お、う、を、お、の、め、う、く、お、ほ、も、ろ、ぬ、ろ、海、不、う、き、こ、い、も、お
く、海、く、一、羽、之、小、は、ま、ま、れ、等、ん、を、く、よ、め、な、杖、葉、葉、ゆ、
ま、の、ほ、く、く、く、く、と、し、深、き、よ、け、お、ろ、男、を、ん、か、の、こ、こ、ろ
ハ、わ、る、ハ、袖、つ、く、こ、ろ、一、或、ハ、つ、ま、め、く、海、く、と、こ、胡、蝶、ハ、花、く

等、と、よ、れ、お、け、ま、れ、ハ、蝶、を、お、く、山、へ、ま、ハ、あ、を、り、く、此、取、く
み、う、れ、の、ま、う、杖、を、り、け、方、れ、花、の、志、つ、枝、み、ま、く、川
ま、ハ、く、お、み、あ、い、く、ろ、花、や、ろ、お、ろ、小、袖、の、け、ら、く、く、綉、む
し、ろ、花、毛、せん、む、ろ、く、志、死、く、く、く、山、海、此、珍、物、を、
舌、の、ご、み、あ、く、海、く、合、ま、れ、益、成、ゆ、ひ、れ、た、れ、み、免、く、
は、太、ハ、海、く、れ、を、と、に、む、さ、ゆ、つ、く、尾、を、よ、り、替者
ハ、来、れ、な、み、を、ひ、て、や、れ、ま、く、頼、今、む、ろ、く、こ、い、ひ、く、
ま、ま、く、く、む、き、く、く、く、く、は、や、く、く、わ、く、こ、と、を、お、た、り、り
き、け、ハ、ま、れ、を、り、を、ま、く、さ、ん、さ、く、ハ、家、あ、く、あ、ひ、つ、く、
ま、ろ、く、ん、と、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、
あ、く、ん、さ、く、あ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
志、ぼ、り、を、お、く、ま、く、れ、む、ろ、を、り、ん、れ、ハ、二、ハ、を、り、れ、お
髪、を、れ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

おろくからいれあふさし神代歌うし月法む中れおひに
あふらるるふ人と思ひてもおひ人うきあふ年月
この野山都後老碩の追悼小

なうてそとひきん人のえれとも才にあくれはらきふのふか
松の坊寂性老河因梨遷化の後波幸ふ人をもつれ
— 雲城うんく

思へとも海のたひや極室— け寺の名れ松をうくふ
去子の深夜ふ所はうり— 人れ詠草のうくふ
佛名城うれつて種く— この種く奥の沈ふたさめまうと
て其紙うきうり— 人れ

残— 室祠の花か表ふあひてもるまもつをぬ人のうらふさ
この種くひくむき— 止め院うの許りりわらう
そのの迷花をこひけり— 唐歌大和歌大逆仰

高山上山とあり— 紀句の末れ字然やうけく

夏に吹松の風ふさうひても公のちりハはり方やはく—
墓の世はいとふあえ— この種く山は沈む乃わく也
ゆり— ねと誦せうまう— 返— ー

夕立

入日影うはちも涼— ぬかやまはれぬら思れあふり玉筆
月夜ふ木のたうりあふさうく— おはらをさうく
はくく— 夢も才にしを涼い木れあふれあふの月よふれて
葉花よ— 藤をうきうふせ— 小

さなりしも入野をふせと病たふ行ふを乃あく
けい— うりそあをうり— さうりらう— 月れ詠歌
よあふ都れ人の許りり— け西はたやうけうへ— づ

のしづりゆきをれ執りくふきつゆりあつとみふ
たふとくくしとくまを歌一首もふくさりつれと
山ほどとひくしそく初人をしりきくをぬらと一文字
西風より愛みさくしとて世世の月と出る人いさよひの比

海鳥と月 尚在

わされやいほくわれと夜の月み涼し床の浦さく
あふらふしとて世世あへ十二三とくりれ少子のうら
わきまのものをくしとれをえしにほられたぐささうら
ほふろりくくらのめくくあゆまへし海鳥くさま
横さほらふくしと車のめくちやふくまふむりきさなハ
とくくしとてわあひをぬき初瀬れやうき
平地より月をぬき事されくさくふく系哉
渡りくしとてそ外さまく此飛瀬るおの男力女

僧居きりばむやと我はくくしと見たりとく思ひく
ふれと見しちも世々あやしくあつた女はとれはつれ
のしとく醜女はさひあふし似たり笑女害をとくその
はらこやふ醜女害はちちのうらふしそれなうしつ
まも害をぬきあつとさつれと出家沙門の身とて
女はるものなハのうらめくやいとをはふらりもた
それおのくしとくしとくしとくしとくはくくしとく
へし女みたとされしきんはいゆしとく念世菩提の
根はあちとく悪縁み随はしとく

水郷霧

昔火あぐ煙とくしとく霧波く夕風きとくあつた霧
秋風
来れりたり思ひて海不悔風も勢あつるなほの萩原

旅曉

鳥うきふたれおとちあひらふもまじくこもきあなぬをそとあう
江色に曉萩

枕枕誰ふあをそとれを江のあつぎにふる萩のうらうせ

麻笈と秋友

山より人こそとこひさしくハ枕あつぎにふる萩のうらうせ

雨後重陽り

さきこやあの名残れあつぎにふる萩のうらうせ

寄松虫恋

飛より萩の所をさあひもさうれあつぎにふる萩のうらうせ

寄後撰恋

あてぬきにうら云の糸はあつぎにふる萩のうらうせ

七月十二日此期脩然亭より大井川の志がけにて

山の名は嵐の乃也をれあつぎにふる萩のうらうせ

曉時雨

村時あつぎの萩もあつぎにふる萩のうらうせ

関時雨

時あつぎもあつぎにふる萩のうらうせ

義堂

あつぎにふる萩のうらうせ

天後宮奉納十五首の内 新山正統寺

萩葉

山嵐もあつぎにふる萩のうらうせ

残鳳

まぐもあつぎにふる萩のうらうせ

埋火

わたりし紅糸の後此煙火はうたはたうとあるもそれらとて
別意

和らましハ後う現つうり青も面影ちううと梅も枕り
思ふ去

凡琴のあそへし時も神も思ふわうなる松風乃琴
曙山雪

神も思ふ時も神も思ふわうなる松風乃琴
初雪

はなとくちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
凡雅依のさう海さ向くわうそともはなとくちうそとも
もむしうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
志むとなれちり梅まうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
うそともはなとくちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも

更く梅乃月をもめめめーなとくちうそともはなとくちうそとも
中に樂あり

かちうそともはなとくちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
寄神祇祝

あま祈れ人の心もそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
享保十己巳年

秋筆

笑のふしー君ものおももれかちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
龍名乃勢我夢う

所れともかちうそともはなとくちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
早故宰お公長郷湯三四忌小梅花一枝の物

てあのちうそともはなとくちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも
妻かちうそともはなとくちうそともはなとくちうそともはなとくちうそとも

時老くぬ心も時一故人あつて遠はまろりおひいたち
林蔭のちりちりしてささるる根りのあり
あま、福くよを神をめぐりては心のあまよはひは
―云のゆくひ月老のよの繁はりて一ははを
ちせりなせり人のたそ見こ―れ、云者新友梅居士
なり、い、居士のんきね、松とよに梅地い、居士の名梅
とよりに昔―、そのちをひとよさふまは、七とち
み、あままりい、魚―古来まはるるといひもな
うくさ、海をき―や、その際、さくやうもこ―たく
かさ―あ―して、老はれ一あろり、突―て、あ―く
ハ、系、北、峯、の、守、る、城、ま、ら、ら、り、梅、く、あ、ひ、あ、く、め、や
去、う、の、こ、ろ、お、よ、と、ゆ、く、靈、蹤、古、跡、を、―ら、せ、り、あ、り
う、ひ、梅、の、さ、ゆ、さ、れ、く、地、を、ま、む、ち、ま、ぬ、く、う、り、く

か、し、此、事、ハ、幸、々、親、人、ガ、子、れ、ま、名、乃、序、跋、不、む、つ、う、
う、か、う、れ、の、こ、ろ、の、ま、り、な、り、ま、り、と、ま、り

享保十年二月三日

似雲

右、左、き、り、に、も、と、あ、ま、れ、と、出、ゆ、り、ぬ

誓願寺乃未開紅の梅をうらま

む、このぬれをさうりとくねるいの名も世も白く、庭の梅人
二月九日小梨木所といふ、西、山、に、あり、あ、ろ、に、ね、き、り
ま、き、り、に、も、と、あ、ま、れ、と、出、ゆ、り、ぬ、
二、三、人、あ、そ、ひ、り、り、あ、ろ、の、と、こ、ろ、ひ、た、れ、と、い、ひ、う、孫、ま、
ら、く、も、い、は、ぬ、ひ、や、ろ、り、さ、れ、た、と、ま、の、子、死、ま、る、と、
あ、ま、ら、と、ふ、使、ま、と、い、ひ、う、この石の下に、う、あ、ま、り
―、ひ、た、る、う、り、あ、ろ、と、い、ひ、ま、れ、と、い、ひ、ま、れ、と、
ま、に、物、子、に、も、佛、性、の、念、佛、北、功、徳、む、れ、―、う、ら、

公母謝れまのへ娘く念して道苦く——はたれおれ
いふまじくちうきひもく——いとけちんおめて
うくおひちりおひまうくはつ——希有れり
みゆり——

日十九日に松尾山乃花城へんま

笑苑の折はまきよ松尾山乃川のあ——い雲母吹とも
浄生十四日白泉別とら記とつふおめて

降るれらたの墨ハ名の——して志くになんか娘の夜
日十八日之の種く乃花城

この種くは若女甲い白雲ハつえおらまを花のあはなり
日おめて浄生二十日お勝まり——こめとつへ
少くをとりくこゆり

妻風ふとぬくちうぬをとも志くてこめ——人の面影

い人の法名法真といひたれて道苦の寸志

春物うもあもたれくちう法の真の月やんく
同日ま別下の奥幻位初めこりちとく花
をこく

毎てぬく佛もつけこの種く浮世の外れを乃のみ向ん
亡父唯笑居士遠忘道福の為いおめて一七日念佛
終——をかりて廿八日ふい居を出る時さ——にうれ
はあちをり——

卯月一日

我のこを海山おそれの口為一本のさくちう——て
まは海——此位家なくもんち花よ又こまを賢うちう
夏きぬとおよまうそ衣えちちく山おのちそひみ
梅花をこく

時々ぬむもありりるる種心交のうれ秘ま自不梅うえ
日十八日たり。古言日すて。あつ。女藝園水哉亭下
こりりわら。佛事。亡父唯笑居士が。しらわら
好ひ。一。海乃。口。は。さ。さ。ひ。母

し。の。か。り。ま。て。た。り。ぬ。身。と。る。ま。い。ん。め。う。り。云。の。葉。し。か
し。と。あり。一。字。一。文字。越。う。ち。り。君。祿。の上。り。母。垂。て
二十五回忘れ。道。若。の。寸。志。小。遺。像。れ。靈。前。小。使。を。ら
と。と。垂。し。け。云。此。葉。も。海。う。ぬ。親。の。い。ま。め。の。ま。ら。う。り。ん
志。か。一。世。小。抄。我。身。も。ぞ。蝶。れ。も。ま。ま。と。う。そ。ま。ら。う。め。長。り。つ。中。て
あ。ま。ま。ぬ。命。あ。ま。と。の。ま。ら。れ。も。り。末。を。く。所。城。と。う。り。ん
ま。り。り。と。不。友。性。の。弟。も。と。そ。い。又。お。ま。ち。の。人。世。の。あ。い。と
と。海。く。ち。る。あ。の。そ。も。あ。人。の。世。も。葉。葉。の。風。れ。夕。立。乃。あ。と
と。ら。て。も。い。世。ち。り。せ。い。と。ひ。て。海。一。と。海。心。の。海。く。そ。り。い。も

ま。の。目。を。あ。と。い。う。と。不。善。と。い。ん。あ。と。何。り。と。も。定。め。ち。ま。ま
と。せ。程。と。志。記。必。し。を。れ。持。と。入。う。と。ま。く。不。友。の。夜。れ。月
お。も。う。ま。ま。と。法。り。と。あ。て。も。い。ひ。を。ち。ま。い。ひ。う。り。と。定。れ。姿。う。り。秘。ハ
と。海。も。ま。い。り。と。い。ん。婿。く。も。た。れ。運。の。花。れ。と。て。ち。ま。不
と。親。う。形。を。海。流。の。清。國。も。と。ち。ま。と。親。む。ん。れ。と。ち。ま。と。と。あ。れ
ぬ。ち。り。と。あ。ま。若。れ。人。を。う。り。若。れ。さ。め。て。と。う。り。と。う。り。と。あ。る。世。を
と。ま。も。う。り。ま。ま。と。せ。も。と。た。れ。お。く。と。お。や。の。な。れ。身。ハ。文。母。れ。一。ま
と。く。法。れ。お。は。り。親。中。又。あ。の。り。と。ち。ま。と。と。さ。り。も。ら。海。流。の。誓。ハ
な。ふ。ち。り。と。う。り。な。ま。を。う。り。何。も。皆。う。り。れ。世。と。た。り。ひ。推。か。を
ま。い。志。人。の。ま。ま。と。比。と。あ。ひ。や。り。海。流。の。清。玉。の。系。竹。の。勢。又
と。ま。ま。と。比。何。ち。り。な。と。思。ひ。ん。娘。身。ま。ま。ぬ。人。も。あ。ら。せ。り
と。く。ば。さ。ら。と。を。さ。う。と。ぬ。及。其。れ。あ。と。消。り。身。を。お。か。し
と。海。も。く。心。を。さ。い。ら。と。い。う。と。い。ふ。海。と。い。う。と。も。志。れ

花蔭院小者一木やとよに枝ゆり
音ふく雲はをりわらとけくさう唱聲よた山布やまに

浦夏月

夕志不のさーも涼一花月影の阿魯宗ふやふ和秋前夜
寄神社

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
山家後

新樹

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
新樹

夕立

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
夕立

松歴年

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
松歴年

夜月

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
夜月

大神宮奉納 後想勅進

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
大神宮奉納 後想勅進

立春

いふもやめあふも日北木の内并庭くさぬ神の光は
立春

らむえぬ海も月の初来成りてそを繋りきぬく一社
こ早妻堂

妻にや百よりこひを世めつをそ高きまうら谷乃くこひに
水毎月十七日辰上刻水亭よりこりてはねをそ
江場海の中を越え版瀬せよ段已下刻嚴清ふ名
為社海本地親世も家帳のころこもむとぬ
そを使つりそれらり海支社系諸大え社へ訪り
松也て地の清あのを社へよりそはのさだす
み高舟のんをふ舟は入がくの西松を清なる社阿
たりをそこれそ社權れ外高舟の中ふもちやち
んより又一所より海のこももなるう紀竿れ
末ぬちやちんをた右ふさけ垂りてそ當をそ
これいぬぬこ三ツをこつ小床をそ一青竹とそ

欄干をそ造り燈籠阿事こりけつて祓線竹をそ
海つても初れうやまわり清松海社の清前も
いそねひやむきし清神事樂るそありて
うかてねつてうこひめそせねひ又沖へ寄せねふ
沖乃方小清松とそ松阿事こちやちんより
ねくわけらるへ海冠西流こねつまはりまきま
炎賊打籠こ海も溪も西せ舟也人々
系法とひこふこ成志こひたうまはさ海いつくぬも
う居まもやと感海神つこりこりこりこり
月まふふさき安く海乃面きこりこりこり
て嚴清ふよりそねふ
線竹も波小波へてそ清なる神のこり祓を月小清とそ
まそ溪をそ名れ月新うりこり白雲人のまゆ也

けうと入りて本堂虚空藏さまにて佛舍利三光
石かとおもひてまじりて求用持北の若小舟を信
告し佛位お坏頂戴し奥の弘法大師のあふ
ぬつてそれらりてめでたきなりぬとにこのあまを
守護神由しくおぼしめし不浄はいさしめたりと
けく酒を禁し二王門より奥へ入る中よりも笠
裂せりてしむむく人のまは神討立にぬとく
系傍の人くはてしなくおそれをなすりて
日日光明院へ系り和尚と困談しい席着たりとせ
あましく鳥居の淵小舟をたぐに頭おめりてせし
水殿雲樓あつてそりけしとく殿これとく
み免くしうまへにのころも洲邊の松系
んちうち小寺くの境者はれわたりとけりなり

ゆけいふあのは色もあ夜の端小とれたされぬ
百八の神鏡光をやけりてあふりてし海あり
の便し蛇物のさちも志しきし年らつてしけり
日七七日湯社も系傍しお殿古湯のうにゆめく
りん志川系跡をしつて鮎酒茶あとしりてし乃
して必くしりてししけりてしけりてしけりてし
にしししけりてしけりてしけりてしけりてし
るせし名ありしといふ人ありてしけりてしけり
のつしきあつたりけりてしけりてしけりてし
らぬ庭のあはしけりてしけりてしけりてし
西方院をさしけりてしけりてしけりてし
同古八日夜はあて残月をさしけりてしけり
光お映していつれもさしけりてしけりてし

免つ

いとむえおめはれしつと浦めら屋浦梅を面鏡か
浦めらりといふは浦まらりといふは浦めらりといふは年
とにきつたの初申の日より、来月初申此日まらふ
徳園より新之河川にて一七日の暮火を改禦祭し、浦
をめぐらふ事あり、そのおもむいたふは浦師此舟を
柳をまて志めりしつと、社人見小のねりは、はらへ海
むまけりおらひきまらふは、むかひして替あう
き、あまともあまき、えらうつこのつと、新之見まふ
食意のまのつとつとららふとも、あつたあつたあつた
と浦くともともまは、かともあつたあつたあつた
り、つとて浦北校をまめ、やともあつたあつたあつた
先的のめらり、浦本社二所へまらして、それより松出せ

はやくや、舟長めてあひを湯代と音流をいふは、まら
し、替をうけて、舟人抄りては、同多ふつたふ、あつた
揚子海もつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
聖湯松のつと、梅川は、つとつとつとつとつとつとつと
の末、散ら浦心伏せしつと、あつたあつたあつたあつた
まらつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
川大は、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
北大えのつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
湯社よりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
北神よりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
今か、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
れも、あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつひちりく志ゆーやうふたぢぢれ世浦まで海解乃
舟をもちろふ沖へうま出ーゆまくに船を此舟もたけ
まーしこれつそ時女神と笛吹るくせこのまう
愈ーく神鳥一ツうひ海心のうまうりしひまうり
て柳の枝みろ移成体むい神位を臺ふまへ海上
ううま月やうそこのうまをくまうりてととれー
あふおちのなれ船ををりーめ不成就と海
いこまむむちうりに皆人のくーまうりてりー船
うかまに或ハいろくも清うまうりあれハ神位
あら事一那ー又浦まはまといふかうくまをれ
紫舟もなくいあ道遥の為小免ちちりまうり家
もあうりー時あひく清めりぢーまをれハ
いあひんをやうくうちら浦まうりを澄ーゆりー

は浦まかりもいあぢぢる事一清めりうふらちとれーさ
れとい菽湯ありはちりー船は福とんめてあうり
なまさぢく一ツあうりーいさくめまはつあぬま
いさやちりーあうりちりーとそ屋敷のうまを
とりあうりてえれい船をねひちりーにきうふ
とれー見めていよく神鳥ふくくひかーつ
のうらららせの食おをめうをまうて人のとのせ
れうらとほいもまうりくうふら船ちや仏神小
わうらー那ーあふまてえあふくへーたをれ
もあそちへー

朝美花

美花のめらあふあふくけの花はをあふ
寄月祝

神代より海ぬあつて久うこのきふされうう正あお月日新

世女虚名あつて福らうりのおほくハ名女乃及ひく

さふ女海客心真深寺りまきううう空方に願をやく

らせハ海客のこふ事成あまこの風京いこー新陰

師も筆うけりあれハいうてふハ

世を死里此亦立も海心も小もきり外れりのとやハん

九月十三夜大湯亭ゆく

ふ名ぬれハうらなをひと十月の月のと意やめそをむん

同夜そふ鶴たなれをれ

免つらねと存名ふおふ七月ふらうん齡のき鶴たらうん

同十又日例の水亭より松出とくう初坂上何う

許ふ名同十二日法心老尼の山指成さひ梅うて

ゆゑあを正庭の岩根ふせれ入ぐきうんぬふ人やまむらん

今此語ふいしく学又をれ一えんおと三あんあて六

うをひくくくそのふ城いしく利根上根黄金と緋

城願ふし誰を股にせしうらう上根をりて最上

とまふ利根の人見ふはれなんうらぬわさひきやう

ぬらうくふ影ひまれもころねもううす氣さハ

やうにしてうをさうしとまれとともまれの自他

乃害もらぬ一螢者の害ふ又城ゆれた壁をう

うあなと梅うく志てそあ又成せし人座も大和も

ためしまらぬうらぬこあう人の遊興好色にんあられ

氣うれれつう立うくするふ道も契園るう

以見黄金の害をくはやうらう也ふ三つの内黄金

成りて葉根小抄む葉根城喫得と何事うね

へうささむ

神世月十五日水残亭より松出を

日十六日をもんどのせとあつて舟人のうへに我ゆて
波風もおさはる困とこのせとれをんとあつふあふ舟人
同日加波のりといふこころ海めて

ゆたのめをむすふく蟹人も爰小玉のやう海よりせと
鞆乃浦小破し海

吹風も爰もむすぬ腕枕もあつふ舟のともれ浦わ
播磨海めて

ふらふともなく吹風も帆片帆をれれし波の遠方
海つらに一止もあつて人をもれ舟人よとひ
一止風のたしひをれ

海京や吹ぬる一止もあつて波みりつらつて舟の海ひ海
同日乃表

さむら夜も月小わをれて次二船名正とるふとおしを流の浦浪

七月十三夜一止もあつて一止人の許へ送らとる

七月の名もあつても今年よりめらりあふ世八海もあつて
同日同日同和めて懐旧

うたせととひもあつて一止もあつて一止もあつて
渡川乃水車はつら

ふらふらあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
夜もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

十一月十五日夜之丘亭より

冬山霜

さうあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
さうあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
日十六日先難亭より

河千鳥

賀茂川やうらたに遊くはむ月小波もさむむきりハなるが夜
日は五日高松家少少

思恋

是の川ねり人のとほて志れきうはあぬのぬきこころを
柿本の海神形を不思議といは舟中少くを
得依く初會當座

松暦年

云の葉乃乃のあ光ふしく千世もあうの松乃色がはじ
十二月は日朝の君哉んく
浮若ふとときをりれ去梅や竹を新駕乃あぬのうくれう
きりーは甚藝園(うら)海きして浮糸の星にやうり
ける表い交の輪乃ののなまとおうこらう次より

このあちー帯に人とむらまーくあまわらんぬり
まねはげゆをすくこらうくの情海客ふたひやも
おふつうれしきれあぬあは流の園をり軍洲小長
昔人のあちー浮世哉しひまらぬこその昔も
池水ふらうひんかこんをらにさうあやう起のわー気
をうしまつらまー舟路の用意小ハ又る記りに
情房とそこをうらぬれは竹を骨とせしこり
ぬきのちねら梅れうーあちあちと見をまに
支脚をこちひまき入帯のわらうまてぬたあを
てこれとされう腹小強をせしさほして美う
るおおたりたり時ふ我しひハ大切なるお中をに
うらに船水上の浮世おあひと希有ふらぬ
わらううらぬのをしぬりーんさー海をり

あさうしとらふ人されといさうおのひちりしものさう
らいたるまやわりのそのふいりうりてくはるを語り
らうしと約しきれか今家母やちるははくくと
浮世に換益とらうりたてぬ人多に一小是風波の
時毎し二小要成ちるまて困くの守護氏家那れり死
るひ有ともうし船中しりくにもあぐひあききに
さもいしと見ときうと二小松母はものいしちあよの
るれらちるちん時の公當れらるの思毎人きらふ
へし三小死生此縁みのそまてうをたれあまらうの
せんやちうしあちあのことともうりてひとりりくとも死も
ち由し一思ふとも死えそ海よるうひわらひとき
より是越ししやまらそて人くあさうし人こそくあ
まらうつたよりりる行ちるむへし五小人かしら

たのきこのなれは死つてぬものちきそともま
れて波上あてらはえりうしらばなれちきあちるり
ハネふろりうてうひむきうん信事れらうらるよ
しう縁てはくふきぬ六六小荒磯の巽那にたはら母
むうねく打あてなをいあちま地換まへしとまら
まもま死すあまは水りりてまりのことなり人はそ
うくあつ世とそあちあゆもさうひつ七小死生今
何りともまは是越し死てもあちあちん時人あつてな
れあとめてそのうらをえむし出家遁世乃所と
しといさうり生越むさあち法よく船中まをに
うたははとあさへしとやされしものうひもねを
法おに溺死たぬらうき事那しあさまし有
換ちるりはさうし捨世あち公八世俗もちとまらりや

人々のあきけりやとてをむじと名付す母船これとも死
後の名をそそめりて一八小家これをとらぬとて
り毎とてうとて舟中のものゆゑに死ん時をさくこれ
しうとてきや九小佛不さるゝ法身をさるゝ苦海不志何
ゆきせ舟中ひても最生法漸度し終はんとの不意
大悲をさくせき舟中ひていふ凡僧ともて
人衆これをもさくはにむじり浮世法ともて毎とて
ん中ひのあきけり十小けり此の法は風波志つるわ
時舟を死ねぬとてそのあはるる舟中ひのあきけり
一風波志つるあきけり舟もさくさくさくか換差
をうとてふれて九換一益とてふれと一益もうとて
て舟中事毎とてさるゝとと領解してうと
ゆりき世上自他の不意はゆくとと親とてにこの海路

のあきけりこのとて我も人をもさくはにむじり
苦海に舟中ひのあきけり舟中ひのあきけり
あきけりこのとてふれあきけり舟中ひのあきけり
を志のうんととてさくはにむじり戒定恵乃とてさく
らうとて貪瞋癡乃とてさくはにむじり
志はまんゆとてさくはにむじりおとれてもなげあそ
るきハは苦海なり舟中ひのあきけり舟中ひのあきけり
ひ出人をさくはにむじり舟中ひのあきけり舟中ひのあきけり
とてはにむじり舟中ひのあきけり舟中ひのあきけり
いくらの人見るとてさくはにむじり舟中ひのあきけり
うとてさくはにむじり舟中ひのあきけり舟中ひのあきけり
もに彼岸にむじり舟中ひのあきけり舟中ひのあきけり
或人のむす免二十九の集り夫病をて舟のあきけり

あれちうんまうてやうと志ぬへー志ふ程はうまはて
くとは紀とひくつよのあされと外の人こまを
きく事ぬへーうほやまひあくとら程おとを
ま志がーもほとらむすうくいひくまえけいあつす
されその日救たうそまは二十日おれまうとをむ
はちくましく見をうあうーいひふりていのうらまの
と何れれとんをほくーゆれとも病はうりもま志うー
ふらと守らち程もむらやふらぬまうひて折やー
ふそらうり程うりをまらふさんとままはいひく志き
まふこのあやーも勢あて志ち程はう後まてくといひ
つせめをちまのたててた程あをしきまう二あやだ
志がーもころをれくま我所のゆくりうたれくゆれ
まをたれくその間ふくまれぬぬゆてまう指たれ

ハ波親せんまらうやあひひをりまん君僧くーひき
うりて何とそ公のあつまらやふ志めーうけまは
きとんたーしてひたれともなうり程あうにも志う
ま無徳の才れいふーてうい病を志川むきとそさ
ゆくふらうて其んま志せきうはまていらまめら
ふもまひをれあうまうーまそころくゆ程たれ
辞まらにまをほまそけくまうーゆたてまれのゆ
ーにまうふひあうーまて病者の才のうまはひ
くこれあゆまう何うはやふらう返しくいひき
まそあひひらまうーまを志あうふまうふあち
まひまうまうへーまひぬくゆかーゆ
まうひより波ちやまはなうへー古れ歌小我もぬ
ーんもむぬーとあひまは何うは世のまらまき

この心を深き心ありて、さうり志多死に甘あはれ
とありひたりし。福哉志つふと記きうせさうつへ
の女さうしをなりし。感通せしむるひめて福
なく不思議なる事、再ふとひてしひし。夢やう
りりこしく、悦ひまれ、すはしく其をみて、歌とて
念佛もさうふへし。念佛もにさ記さうりせし
へん、その下つうしあり、是も腹ふりちさうた
ひしとねた。福と福人あり、さうめして、海りな
は、その夜とて志つうふお、又の福とて、物
をさうく、波やまひ、ゆき、ひたさうり、
いるうり、みさうく、ゆき、ひたさうり、
み、若、福とて、さうり、あさふ、
妙と念佛の功徳と、さうり、
人、此、
さうり、

サ、思、
業、

人、
さうり、

